決　　議

文部省は6月23日，高校の新しい学習指昇要領案を発表した。これによって小・中・高のすべての新指導要領が出そろったことになる。

これらの指導要領の理科の分野では「ゆとりある教育」・「教材の精選」の名において，基本的な内容もおろそかにされている。

小・中学校では示準化石がとりあげられず，また進化の内容がないなど，自然科学の法則性や歴史性を欠いたものとなっている。

高校では，必修の「理科Ｉ」が新設された。その内容をみると，文部省のいう理科の基礎を固めるなどというものではなく，物理・化学・生物・地学の寄せあつめとなっている。そして，系統性もなく，しかも抽象的内容であり，自然の事物・現象から遊離した理科教育をますます助長させる危険性をはらんでいる。

また，共通一次テストなどによる受験体制の強化によってその内容が規制され，理科教育の「自然ばなれ」の傾向は顕著となることも懸念される。

地学団体研究会は児童・生徒の認識を大切にするため直接自然に接する理科教育の実践を積み上げてきた。その立場から，文部省の新指導要領は大いに批判されるべきものと考える。

我々は「理科Ｉ」など，新指導要領を検討し，批判していきながら，我々のこれまでの運動の成果のうえにたって，この新指導要領の中でも従来にもましてより良い理科教育をつくっていくことを決議する。

1978年8月9日

地学団体研究会第32回総会